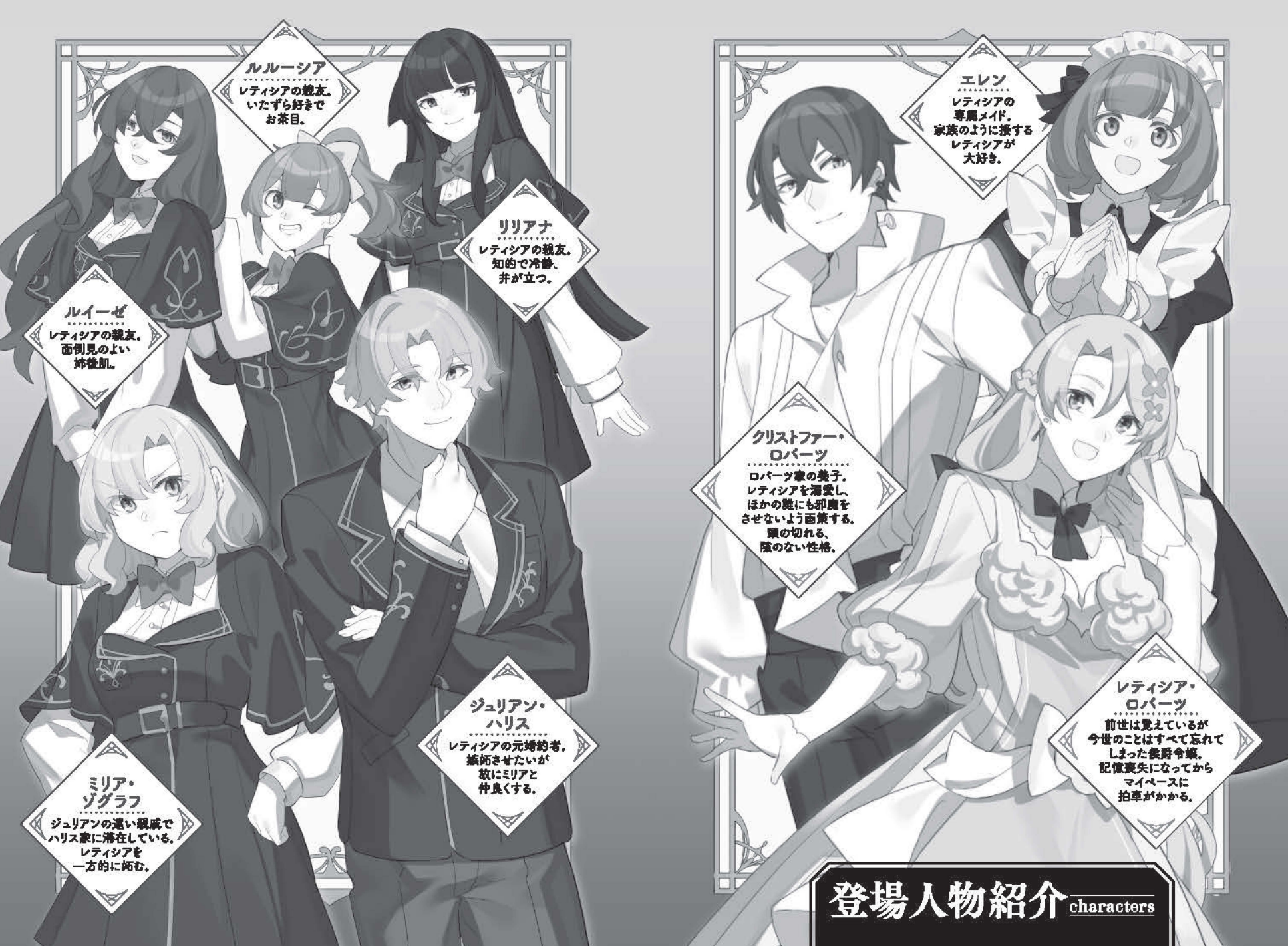
記憶喪失になったら、義兄に溺愛されました。


ルルーシア
レティシアの親友。
いたずら好きで
お茶目。
リリアナ
レティシアの親友。
知的で冷静、
井が立つ。
ルイーゼ
レティシアの親友。
面倒見のよい
姉御肌。
ミリア・
ゾグラフ
ジュリアンの遠い親戚で
ハリス家に滞在している。
レティシアを
一方的に妬む。
ジュリアン・
ハリス
レティシアの元婚約者。
婚姻させたいが
故にミリアと
仲良くする。
エレン
レティシアの
専属メイド。
家族のように接する
レティシアが
大好き。
クリストファー・
ロバーツ
ロバーツ家の長子。
レティシアを溺愛し、
ほかの誰にも邪魔を
させないよう画策する。
頭の切れる、
隙のない性格。
レティシア・
ロバーツ
前世は覚えているが
今世のことはすべて忘れて
しまった侯爵令嬢。
記憶喪失になってから
マイペースに
拍車がかかる。
登場人物紹介 characters

プロローグ

その日、私はある令嬢から呼び出しを受けていた。

「ねぇー。私、今日の放課後にリアン様から呼び出されているの。校舎の裏庭なんて、人気がない場所だから、恋人同士の逢瀬にピッタリな場所よねぇ。ふふっ……。きっと私は、リアン様から愛の告白を受けるわ。良かったら見に来てもいいわよ。リアン様が私に愛を囁いている姿を見れば、親が決めただけの、愛のない婚約者であるアンタは、リアン様を潔く諦められるでしょ？　あら、やだー！　そんな目で見ないでぇ。私達は……、ただ愛し合ってしまっただけなのよぉ。お飾りの婚約者様、放課後待ってるわよ。またねー！」

ぱっちりしたピンクの目に、小さくて可愛らしい容姿のミリア・ゾグラフ男爵令嬢は、自分の言いたいことだけを言うと、すぐにその場を去って行ってしまった。

「……っ！」

ここは貴族学園。私は一人の淑女として、絶対に人前で泣いてはいけないのだ。

どこで誰が私を見ているのかわからないのだから、表情を崩しては絶対にダメ。他者に弱みを握られるのだけは許せない。

たとえ、私の愛した婚約者が、ほかの令嬢に心変わりをしたとしても……

◇　◇　◇

幼い頃からの婚約者である、ジュリアン・ハリス侯爵令息と私は、お互いを思い合う、仲の良い婚約者同士であったと思う。

優しくて素敵なジュリアン様が、私の婚約者であることはとても嬉しかったし、このまま何も変わらず、学園を卒業した後に結婚するものだと思っていた。

しかし、私が貴族学園に入学すると同時に、ある令嬢が現れたことによって、私達の関係はすぐに変わってしまった。

ジュリアン様の遠縁であるゾグラフ男爵令嬢は、ジュリアン様の邸宅から学園に通うことになったらしく、彼女の面倒を見るという都合で、二人は一緒に過ごす時間が増えていた。

ゾグラフ男爵令嬢は、市井（しせい）で生活をしていた元平民らしく、貴族令嬢らしからぬ行動が目立つ。加えてジュリアン様の婚約者である私を、一方的に敵視するような性格の持ち主だった。

ジュリアン様は、ゾグラフ男爵令嬢のそのような自由な性格に惹かれたのかもしれない。

気がつくと二人は、誰が見ても惹かれ合う男女のようになっていたのだ。

何をするにもゾグラフ男爵令嬢を優先し、私を顧みないジュリアン様に、私の心はズタズタにされてしまった。

そして、そんな灰色の日々を送る私に、ゾグラフ男爵令嬢が接触してきた。

彼女は、自分が放課後にジュリアン様から愛の告白を受けるであろうということを、わざわざ私に伝えたのだ。

散々迷った挙げ句、二人の関係の真実を知りたかった私は、放課後に校舎の裏庭に来てしまった。

大きな木の陰に隠れて待っていると、私の婚約者であるジュリアン様がやって来て、そのすぐ後にゾグラフ男爵令嬢が来るのがわかった。

私のいる場所から二人は少し離れていて、会話がハッキリと聞こえない。ジュリアン様は後ろ姿しか見えなかった。

私から見えるのは、ジュリアン様と嬉しそうに話をする、ゾグラフ男爵令嬢の表情だけ。

私に対しての当たりがキツい令嬢ではあるが、ジュリアン様や他の令息達には、愛想がいいと聞く。

上目遣いで、あんな風に可愛らしく見つめられたらジュリアン様は……

次の瞬間、二人の顔が重なる。

あれはもしかして……、口づけ……？
「……っ、痛い」
その瞬間、これまで感じたことのないズキズキした頭の痛みに襲われ、今の自分とは違う人物の記憶のようなものを思い出していた。
この記憶はもしかして……
それよりも、私は今すぐにここから離れた方がよさそうだ。長居をすれば二人に気付かれるかもしれない。
私は頭の痛みに耐えながらその場からよろよろと離れ、迎えに来ているはずの、自分の家紋の馬車まで急いだ。

「……レティシア？　顔色が悪い。どうした？」
いつも顔を合わせても会話すらしない義兄が、私に話しかけてくるなんて珍しいこともあるのね。
そんなに私は酷い顔してるのかしら？
普段は帰宅する時間が異なるため、二台の馬車が別々に迎えにきている。
今日に限って、帰りの時間が義兄と一緒になるなんて、私は相当運に見放されているようだ。
「何でもないですわ」
「何でもないって顔じゃないだろう！　何で泣いているんだ？」

義兄がしつこい。
いつも私のことなんて、興味ないくせに！
「……疲れました。ただ、それだけですわ」
「疲れた？　何に疲れたというのだ？」
「私、婚約を解消したいのです。そうなれば、私は家を追い出されますか？　でも、出て行けと言われれば、すぐに出て行く覚悟はありますから」
「急に何を言っている？」
頭の切れる義兄が、訳がわからないというような目で私を見つめる。
いつもは冷静な私が、こんな風に取り乱すことは珍しいから、義兄には滑稽に見えるのかもしれない。
「ふふっ。お義兄様が気になさることではありませんわね。申し訳ありません。私が言ったことは、どうかお忘れになってください」
兄は何か言いたげではあったが、そのままお互い無言になり、気がつくと邸に到着していた。
自分の部屋に帰って来た私は、部屋で一人になり、更に憂鬱な気分だ。
もう学園に行きたくない。婚約も解消したい。
でも、いくら私が婚約解消を望んでも、聞き入れてもらえないだろう。
貴族の結婚は家同士の結びつきだ。私個人の意見なんて関係ないのだから。

そうだ、家を出よう！　最低限の荷物を持って、しばらく修道院にでも行こうか。
実は、二人がキスをするショックな現場を見た瞬間、私は前世の記憶を思い出したのだ。
私は前世で普通の一般人だった。だから家を出て、平民として生きてやる。
あんな浮気な男と結婚させられるくらいなら、さっさと逃げてやる！
家出を決意した私が、バッグにお金と少しの着替えに宝石を詰めていると、ドアがノックされた。
慌ててバッグを隠す。
「どうぞ」
「お嬢様。大変です！　突然、ハリス侯爵令息がいらっしゃいました！」
メイドのエレンが焦った様子で告げる。
はっ……？
どうして急に来るの？
私の家になんてずっと来なかったくせに。
「気分が悪くて臥せっているから、会えないって断ってくれるかしら？」
「それが、どうしてもすぐに会いたいと言って……、部屋まで来そうな勢い……大変！　階段を上ってきています！」
あの男には絶対に会いたくない。
「エレン、ごめんなさい。私、行くわ！」

「えっ、お嬢様？」
私は窓から外に逃げて、あの男が帰るまで敷地内の離れの邸にでも隠れていることに決めた。
急いでバルコニーに出て木の枝に掴まり、そのまま下に降りようとする。
しかし前世の体とは違って、今世の貴族令嬢の体は、そこまでの動きには対応できなかったようだった。
ドスン！
私は二階のバルコニーから落ちてしまったようだ。
「お、お嬢様が……、お嬢様が落ちて……。いやぁぁー。お嬢様ぁー！」
エレンが叫んでいる声が聞こえる。
体の痛みを感じる中、私は意識を失ってしまった。

第一章　記憶喪失になったけど、兄はイケメンでした。

やっと残業が終わったし、何か美味しいものでも買って帰ろう。明日は休みだから、ダラダラとのんびり寝てようかなー！

うーん……。寝すぎちゃったかな？　頭痛いかも。

パチっと目覚めた私は、軽く散らかっていた自分のワンルームマンションとは違う部屋にいることに気付く。

えっと……、ここはどこだ？

あっ！　さっき見た夢は、日本で社蓄だった頃の私の記憶だ。

今世の私は確か……、バルコニーから落ちたんだ！　でも、何で落ちたんだっけ？

日本での前世の記憶を思い出して、普通の社畜でいた頃の記憶はあって、今世でバルコニーから落ちたことは覚えているのに……、ほかの記憶がない。今の私の名前は何だっけ？

ヤバいわ。何も思い出せない。

その時、ガチャっと扉が開く音がする。誰かが部屋に入って来たようだ。

「……お、お嬢様！　目覚められたのですね！　ああ、神様……。今すぐ、旦那様達を呼んできます！」

元気なメイドさんだ。あの態度を見る限り、私とは仲が良かったっぽいよね。しかし、あのメイドさんが誰なのか、全く思い出せないんだけどー。

すると、部屋の外からバタバタと騒がしい音がする。さっきのメイドさんが、旦那様とやらを呼んできたかな？

「レティシア！　ああ、良かった。目覚めたのだな」

「……うっ、うっ。レティシア、良かったわ！」

普通に美男美女の、お上品な旦那様とその奥様らしき人達が来た。

しかし、誰だかわからない私から見たら、ただの初対面の人達だ。

「レティシア、どうした？　まだ体は辛いか？　すぐに侍医が来るから、しっかり診てもらおうな」

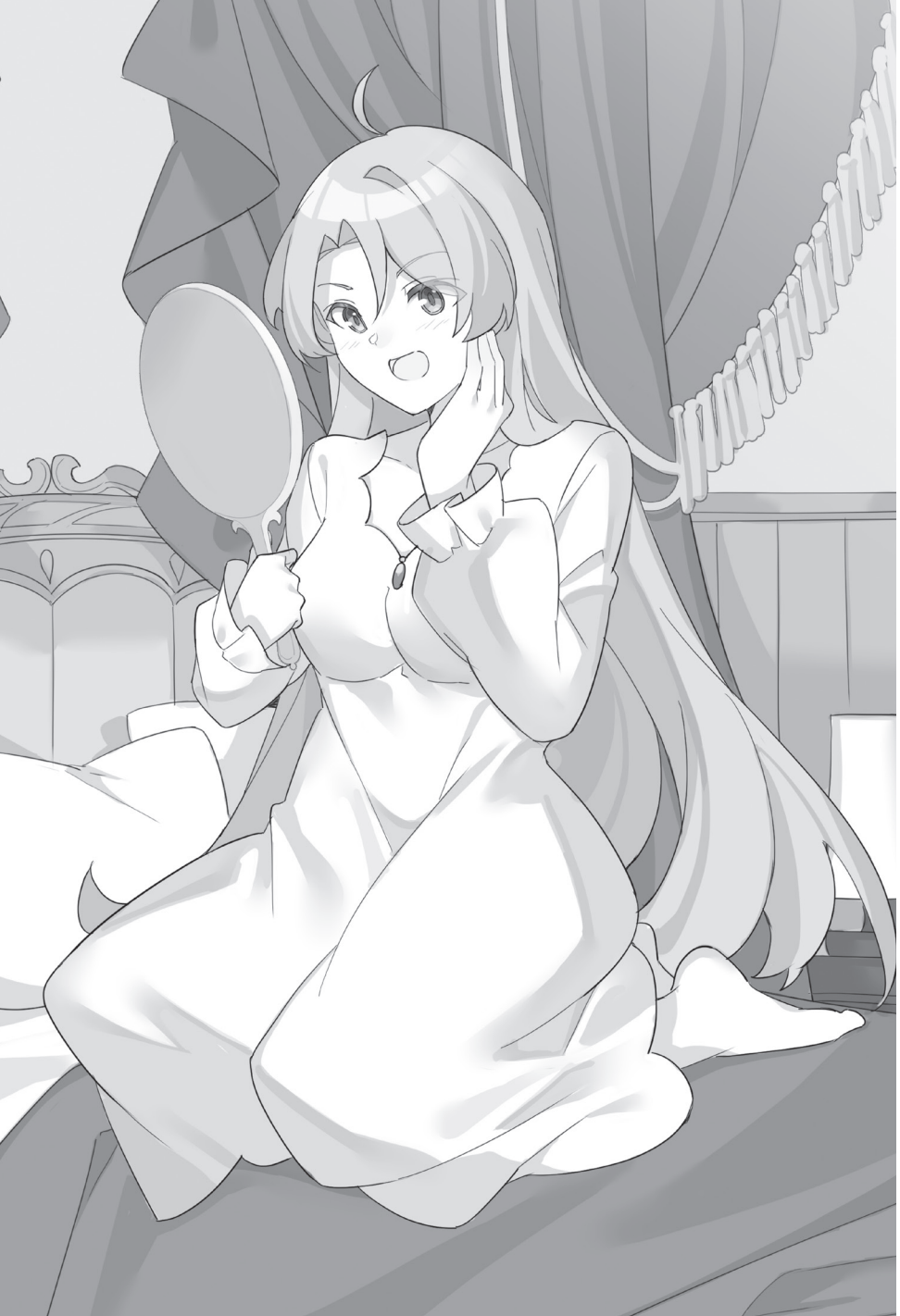
「そうね。目覚めたとはいえ、まだ体が心配だからしっかり診てもらいましょう」

恐らく、今世の私の両親だと思うのだけど……

「……あの、お二人は私の両親なのでしょうか？」

「な、何を言って？」

「レティシア？　お父様とお母様を忘れてしまったの？　……なんてこと！」



両親らしき二人は顔が蒼白になってしまった。
その後、すぐに侍医に診てもらい、両親や使用人達のことを全て忘れている私は、記憶喪失になったのだろうと診断された。
頭を強く打っているので、その時の後遺症らしい。記憶が戻るかはわからないが、しばらく療養して様子を見ようということになった。

落ち込む両親やメイド達が私の部屋を出て行き、私は部屋で一人きりになる。
よし！　これから一人作戦会議をしようか。
とりあえず、さっき両親が教えてくれた、自分自身の情報。
私の名前はレティシア・ロバーツ。
侯爵家の令嬢で、十六歳になる貴族学園の一年生。家族はさっきの両親と、二つ上に兄がいるらしい。兄はまだ帰って来てないので、顔は知らない。
バルコニーから落ちた私は、十日くらい意識を失っていたようだ。
それよりもすごいのは、なんと今世の私は驚くほど可愛い美少女だった。
ストロベリーブロンドの綺麗な髪。長いまつ毛に、ぱっちりしたサファイアのような綺麗な目。
白い肌にプルンとした唇。かなり可愛いよ！　ラッキー！
家は金持ちみたいだし、可愛いし、今世は楽しい人生を過ごせそう。

ふふっ！　生まれながらの勝ち組よ！
鏡に映った自分の顔を見てニヤけていると、ドアがノックされる。
「はい」
ニヤけた顔を見せたくない私は、慌てて表情を引き締めて返事をした。
「失礼いたします。お嬢様、お茶をお持ちしました」
さすが金持ち貴族だわ！　可愛いメイドさんが来て、高そうなティーカップにいい香りの紅茶を注いでくれた。
「いい香り。ありがとうございます」
「……いえ」
このメイドさんは私を見て、なぜ悲しそうな表情をしているのだろう？
それよりも……、紅茶がすっごく美味しい。いい茶葉を使っていて、淹(い)れ方も上手なのね。
さすが金持ち！　メイドさんのレベルも高いらしい。
「とっても美味しいです」
美味しい紅茶を淹れてくれたメイドさんに、笑顔で紅茶の感想を伝えるのだが……
「……うっ、うっ。……ううっ」
メイドさんが泣いている。えぇー、何で？
「どうかしました？　何かあったのですか？」

「も、申し訳……ありません。お嬢様が記憶を失くされ、雰囲気まで……っ、変わってしまって」
泣いてくれるくらい、私と仲が良かったということなのかもしれないな。ありがたい存在だよね。
「私のために涙を流してくれているのね。それなのに、私は貴女のことも忘れてしまったのね……。ごめんなさい。改めて、貴女の名前を教えてもらってもいいですか？」
「私はエレンと申します。お嬢様は、私をエレンと呼んでくださっていました」
「そうなのね。じゃあ、これからもエレンって呼ぶわね」
「はい」
毎日私の側にいるメイドさんは、きっと私の強い力になってくれるはず……
「エレンにお願いがあるのだけど」
「はい。何でしょうか？」
「エレンと私は、仲が良かったのよね？」
「私のような者が、お嬢様と仲が良かったなどと言っていい立場ではありませんが、お嬢様にはとても良くしていただいておりました」
記憶を失う前の私は、やはりエレンとの関係は良好だったらしい。
「じゃあ、エレンの立場で私の忘れてしまったことをいろいろと教えてくれると助かるわ。よろしくね」
「はい。私の知っていることでしたら」

「ありがとう。頼りにしているわね」
このメイドさんは、私が目覚めた時にかなり喜んでくれていたから信用できそうだ。

エレンとおしゃべりをしていると、またドアがノックされる。
……誰だろう？
「どうぞ」
私が返事をした直後に部屋に入って来たのは、驚く程のイケメンだった。
栗色の髪に青みのかかったグレーの瞳、整った顔とすらりとした長身。
……タイプだわ！
「レティシア。目が覚めたと聞いたから、顔を見に来た。大丈夫か？」
声もステキ！
誰なの？　私を呼び捨てで呼ぶ、このイケメンは？
「……」
イケメンに見惚れてしまい、返事すらできない私。
「レティシア？」
「お、お嬢様！　こちらはレティシアお嬢様のお義兄様であるクリストファー様です」
エレンが早速助けてくれる。

しかし、この人が兄なの？　同じ屋根の下にこんなイケメンが住んでるの？
イケメンすぎて、兄だなんて思えないのだけど。
あまりにも衝撃的すぎて、言葉が出てこない私。
「レティシア、私のことも忘れてしまったのか？」
私が記憶喪失になってそんなに悲しそうな顔をしてくれるなんて、私達は仲が良かったってことかな？
だけど、悲しそうな表情ですらヤバいくらいにカッコいい。
「あの、私のお兄様なのですね？　記憶が失くなってしまい、ご迷惑をお掛けしますが、どうぞよろしくお願いします」
「……よろしくお願いします？　初対面みたいだな」
寂しそうにフッと笑う、私の兄だというイケメン。
「申し訳ありません」
「謝らなくていい。体調が戻るまでゆっくり過ごすようにな」
イケメンのお兄様は、そう言って部屋から出て行った。
これって、もしかして何かのご褒美だったりする？
前世では、みんなから社畜と呼ばれるくらいお仕事を頑張っていたから、今世では金持ちの家で、のんびり美少女ライフを過ごしていいよってことかな。

ついでに、私好みのイケメン兄をオマケにつけておいたよって、神様が私にプレゼントしてくれた？
そうだったら嬉しいけど！
「お嬢様……、大丈夫でしょうか？　突然、クリストファー様が部屋にいらしたので、驚かれましたか？」
あっ、いけない！　お兄様があまりにも私の好みのタイプすぎて、ボーっと考え込んでしまっていたわ。
鼻の下が伸びていたかな？　エレンにみっともない顔を見られちゃったかもしれない。
「だっ、大丈夫よ。同世代の兄妹は、ちょっとだけ気を使うなぁって思っていただけよ。それよりも、さっきは私のお兄様だと教えてくれて助かったわ。ありがとう」
私がお礼を伝えると、エレンの表情が柔らかくなる。
「それは当然のことですから。それよりも、さっきはお嬢様が変わってしまったと泣いてしまい、申し訳ありませんでした。お嬢様は記憶を失くされていても、私に優しく接してくれるところは以前と一緒ですね。お嬢様はお嬢様です！　私はお嬢様に仕えることができて幸せです」
なんて嬉しいことを言ってくれるのー！
「エレン。私こそ、記憶喪失になってしまったけれど、貴女が側にいてくれて幸せだと思っているわ」

「お嬢様ー、大好きです！」
記憶はないけど、私とエレンはこれからも変わらずに、仲良くできそうだと思った瞬間だった。
だけど、さっきのお兄様は反則だよね。あそこまでイケメンだと、自分の兄であっても緊張してしまうよ。
ダラダラした性格の私には、ちょっと小太りで、人の良さそうなお兄ちゃんがちょうどいいんだけどな……
でもこの年齢だから、一緒に遊んだりすることはないだろうし、それぞれ行動は別だろうから、そこまで関わることはないよね？
イケメン兄は、観賞用として楽しむようにしようっと。
しかし、私の予想は大きく外れた。イケメン兄は私の世話を焼きに、頻繁に私の部屋に来てくれるようになったのだ。
イケメン兄が優しくしてくれたり、構ってくれたりしたら、つい嬉しくなって笑顔になってしまう元社畜。
私って、本当にチョロい女だわ……
「シア！　今日は、王都で一番流行っていると噂の店のケーキを買ってきた。学園帰りに近くを通ったら、店がまだ開いていたから、運が良かったよ。今から一緒に食べよう」

初対面で私をレティシアと呼んでいたはずなのに、気付いたらシアって呼んでくれるようになり、学園から帰ってくると、真っ先に私の部屋に会いに来てくれる兄。しかも、わざわざ有名店のスイーツまでお土産に買ってくるという、細やかな配慮も忘れない。

イケメンで優しくて、ここまで気遣いができるなんて……。きっとイケメン兄はモテるだろうね。

良くないとは理解していても、いい歳してブラコンになっちゃうよー。

「お兄様、おかえりなさいませ。流行りのお店のケーキだなんて、とても嬉しいですわ。ありがとうございます」

「シアの口に合うようなら、そのうち店を予約するから、二人で行こう」

「本当ですか？　私、お兄様と一緒にお店に行ってみたいですわ」

「そうか！　では、シアが元気になったら、二人でその店に行こうな」

ああ、笑顔が尊い。思わず手を合わせて拝みたくなっちゃうレベル。

二人で行こうだってー！　ちょっとしたデートみたい。

お兄様は選ぶのが難しいくらいたくさんの種類のケーキを買ってきてくれた。私はその中からクリームとフルーツがたくさん入ったショートケーキを選ぶ。

優しく微笑んで今日も当たり前のように私の隣の席に座り、私がケーキを食べる様子をジーっと見ている。

食べている姿を見られるのは恥ずかしいし、ちょっと距離が近い気がするんだけど……

「シア、ケーキのクリームが口に付いているぞ。しょうがないな……」

お兄様はフッと笑うと、私の口に付いていたクリームを指でとって……、ペロって……、舐めちゃうの？

その瞬間、私の顔がカァーっと熱くなる。なぜなら、クリームを舐めるお兄様が危険なほどに色っぽく見えたからだ。

お兄様のその仕草にすっかりやられた私は、無意識に自分の鼻の下に触れて鼻血が出ていないかをチェックしていた。

ケーキのクリームを口に付けちゃった私はダメ令嬢だけど、貴族令息が指でそのクリームを取って舐めるのもダメだよね？

チラッとエレン達の方を見ると、みんな顔を赤くしていた。

イケメンって、何をしてもすごいのね……

「お兄様……、お恥ずかしいですわ。クリームが付いていることを教えてくださったら、自分で拭きましたのに」

「シアは恥ずかしがり屋なんだな。別にこれくらいのことは何ともないだろう？」

何ともなくないですから！

そんなことされたら、普通の令嬢ならあっさりお兄様に落ちてしまうよ。

イケメンがペロってしたら、すごい破壊力あるからね！

「シア。黙っているが、怒っているのか？　可愛いシアを見ていると、つい面倒を見たくなって、あれこれ手を出したくなってしまうんだからしょうがないだろう？　シアは、私のたった一人の大切な妹なのだから、それくらいは許してほしい」
私の心臓がありえないくらいドクドクしている。
このお兄様は、私の心臓を酷使させたいのかしら？
「……シア？」
「はっ、はい！　わ、私もお兄様が大切ですわ。お兄様がいつも優しくしてくれて……、とても嬉しい……です」
今の私は、お兄様にその言葉を伝えるだけでも命懸けだよ。
「シアは私の一番の宝物だから、優しくするのは当然だ」
「……ぶっ、ゲホッ、ゲホッ……」
「お、お嬢様！　大丈夫ですか？」
紅茶を噴き出してしまいそうなことをサラッと言えるお兄様。相当危険なイケメンだわ。
お兄様が私の部屋を去った後、こっそりエレンに聞いてみた。
「エレン。教えてほしいのだけど、この国の兄妹はうちのお兄様みたいに、妹をあそこまで大切にするような関係が普通なのかしら？」
前世だったら、あんな関係はありえない。

仲の良い兄妹はたくさんいるだろうけど、あんな風に妹に接していたら『〇〇の兄ちゃん、シスコンだってよ』ってみんなに言われるだろう。お兄ちゃんに彼女ができなくなってしまうパターンだと思うの。
「お嬢様。正直に言わせていただきますが、この国で兄妹といっても、いろいろなタイプがあると思います。お嬢様とクリストファー様のように仲の良い兄妹もいれば、口喧嘩ばかりしている兄妹やお互い無関心で会話すら成り立たない兄妹もいると思います。クリストファー様はお嬢様が可愛くて仕方がないのだと思いますわ。もし私が、おそれおおくもクリストファー様のお立場であったなら、私も常にお嬢様の近くにいてこれ以上にないくらいに可愛がっていたと思います。溺愛します！」
「……そうなのね」
自惚れるわけではないのだけど、エレンは私が大好きなのよね。私もエレンが大好きだから、何の問題もないんだけど。
私大好きのエレンに聞いてもあまり参考にならなかったかな。
でも、兄妹仲良しなのはいいことだよね。
その翌日、お兄様はまたたくさんのスイーツを買って、帰って来てくれた。
「シア！　今日はシアが好きな、クリーム系のケーキが人気の店のスイーツにした。一緒にお茶にしよう」

「お兄様、おかえりなさいませ。私の好みは、お兄様にバレていたのですね。ふふっ……。さすがお兄様ですわ」
スイーツは何でも好きだけど、私は特にクリームが大好きなのだ。
お兄様は、私が好んで食べているものをよく見ているようだった。
「大切なシアのことは、何でも知っていたいと思うだろう？　シアは、スイーツを食べる時の紅茶は砂糖なしのストレートティーで、飲み物だけの時は、涼しい日はココアかミルクティーで、暖かい日はレモンティーだってことくらい知っているさ。クリームは好きだけど、チョコクリームはそこまで好きではないこともな」
えー！　そこまで私のことを知ってくれているの？
お兄様だから嬉しいけど……
そこまで私を大切に思ってくれているんだね。私もお兄様のことをもっと知りたいかも！
この時すでに、私はすっかりブラコンになってしまっていた。

◇　◇　◇

あの日、生徒会の仕事が休みでいつもより早く下校できることになった私は、久しぶりに義妹のレティシアと一緒の馬車で帰ることになった。

馬車で義妹を待っていると、浮かない顔をして彼女はやって来た。彼女には珍しく音を立てて慌てて馬車に乗り込む。
そして、人前で泣かないように育ってきたはずの義妹が涙を流していたのだ。
何があったのかを聞いたのだが、何も話してはくれなかった。
ここ数年、まともに会話をしてこなかった義兄に突然問われても、話をしたいとは思えないのだろう。
そして義妹は婚約を解消したい、家を追い出されてしまうなど、驚くべきことを話している。
義妹がこんなに取り乱すことといえば、恐らく婚約者絡みだろう。
邸に帰ったら、義妹の婚約者に纏わりつく目障りな女の監視をさせている影から、話を聞いてみることにしよう。
しかし邸に着いた後、義妹を部屋に一人にしたことを私は後悔することになる。
邸に着いて少しすると、騒がしい音が聞こえてくる。
部屋を出て見ると、義妹の婚約者のハリス侯爵令息が義妹の部屋に行こうとしているところであった。
普通なら応接室あたりで待つべきなのに、何をしているのだ？　この男は最近、うちの邸に来ることはなかったのに珍しいこともある。

私は気がつくと非常識な男に声を掛けていた。
「ハリス侯爵令息！　うちに何の用だ？　今日はあの女は一緒ではないのか？」
声を掛けて気が付くが、ハリス侯爵令息の顔色が悪い。しかも、私がいるとは思っていなかったようで、声を掛けられたことに驚いているようであった。
「……申し訳ありません。急ぎでレティーに会いたくて」
弱々しい言葉だった。
その時、義妹の部屋の方からドスンという音がする。そして……
「お、お嬢様ー！」
義妹の専属メイドの叫ぶ声が聞こえる。
ただならぬ雰囲気に義妹の部屋に駆けつけるが、レティシアの姿が見えない。
「お、お嬢様が……、お嬢様が落ちて……。いやぁぁー。お嬢様ぁー！」
メイドが取り乱してバルコニーの方を見ている。
すぐにバルコニーに向かうと、義妹がバルコニーの下で血を流して倒れているのが見えた。
義父も義母も不在の中、急ぎで侍医を呼び出し、義妹を診てもらう。
命は助かったが、いつ目覚めるのかはわからないと言われる。
「お願いです！　レティーの側に付いていたいのです」
ふん！　最近は義妹に対して冷たかったくせに、この男は何なんだ？

「悪いが、今日は帰ってくれるか？　それに、あの女が待っているのではないのか？」
「ミアとは、そんな関係ではない！　私にとって大切なのはレティーだけです」
「……そうか。そんな風には全く見えなかったがな。まあいい。とにかく今日は帰ってくれ！　誰か、ハリス侯爵令息が帰るから、見送りを頼む！」
強引にハリス侯爵令息には帰ってもらうことにした。
その後、呼び出した影の話と影が記録として撮ってきた映像石の動画を観て、私は怒りで震えた。影にどうしてもっと早くに報告をしなかったのかと怒りをぶつける。しかし影からは、何度も報告に伺ったが、忙しいから後にしろと言われてしまったので、なかなかできなかったと言われてしまった。
そうだった……。最近は生徒会の仕事や、王太子殿下の執務の手伝いなどもあって、とにかく忙しかった。その結果、こんなことになってしまったのだ。
しばらくは、レティシアのことを最優先にしよう。
あの男と尻軽女は絶対に許さない。

私がレティシアと出会ったのは、十二歳の時だった。
名門のロバーツ侯爵家の跡継ぎとして、分家の伯爵家の三男だった私が、養子として迎えられたのだ。

この国では爵位は男子のみが引き継ぐ。一人娘のレティシアは家格が同じ侯爵家の嫡男と婚約を結んだので、私が跡継ぎとして養子になったのだ。
当時まだ十歳だったレティシアは、とても可愛かった。整った綺麗な顔立ちに、ストロベリーブロンドのサラサラの髪とぱっちりの青い綺麗な目。こんな瞳で見つめられたら……
「一人っ子だったから、兄ができることをとても喜んでいたのよ」と、義母上が話しているのを聞いて恥ずかしがっている姿もまた可愛い。目をキラキラさせて、『お義兄様』と呼ぶ姿も、なんて愛らしいのだろう。
恐らく私は、この時にはすでにレティシアに恋をしていたのだと思う。
しかしもうレティシアには婚約者がいた。だから私は、この気持ちには気づかないフリをした。
レティシアと婚約者は普通に仲が良かったと思う。
婚約者のハリス侯爵令息はレティシアを大切にしているようだし、時間があるとよく会いに来ていた。レティシアも嬉しそうに受け入れていた。

しかしある日、私は二人の会話を聞いてしまった。
「レティー。君は義兄上と僕と、どっちの方が好きなの？」
「えっ？　私はリアン様も、お義兄様も大好きですわ」
お義兄様も大好きって……。レティシアは可愛いな。

「義兄上も大好き？　そんなこと言わないで。僕だけを好きでいてよ。僕は、レティーと義兄上の仲が良すぎて嫌なんだ」
仲が良いから不安なのか。しかし、私達は義理とはいえ兄妹なのに……
「リアン様は大切だし、大好きですわ」
「……じゃあ、あまり義兄上と仲良くしないでね」
コイツ、何を言ってるんだ？　義兄に嫉妬なんて見苦しい。
「お義兄様と仲良くしてはダメなのですか？　私のたった一人の兄なのに」
「僕の頼みが聞けないの？」
ハリス侯爵令息の声が低くなる。
この男はレティシアを脅しているようだ。
「……わかりました」
その会話を聞いた後からだと思う。仲が良かった私達の関係に亀裂が入ったのは。
両親は仕事が忙しくて家にいることが少なく、まだ幼いレティシアは、一人で寂しい思いをしていた。それにもかかわらず、義兄と仲良くするなと言うなんて今考えると酷いことだと思う。
レティシアは貴族令嬢としては完璧に育つが、家族に上手く甘えることができなくなってしまったように思う。義両親も、そんなレティシアにどう関わっていいのか、何となく悩んでいるように見えた。

だから婚約を解消したら、家を追い出されるという考えになったのだろう。
そんなことはありえない。レティシアは気付いていないが、義両親はレティシアを愛しているし、大切に思っているのだから。
あの日、レティシアがバルコニーから転落して意識を失っていると聞いた義両親は、慌てて帰ってきて寝ないで看病していた。
義母はマナー講師の仕事は辞めてレティシアの看病に専念したいと言い出すし、義父もしばらく仕事を休むようにするらしい。
レティシアがバルコニーから転落した次の日、あの男が訪ねて来た。
何も知らない義両親は、娘の婚約者がお見舞いに来たことを歓迎していた。
「ジュリアン、せっかくレティシアの見舞いに来てくれたようだが、まだレティシアは意識が戻らないのだ。いつ目覚めるのかもわからない厳しい状態だ」
「それでも毎日会いに来ます。レティーが目覚めるまで待ちたいのです」
絶望した表情で涙を流しているが……、コイツは信用できない。
義両親はハリス侯爵令息をレティシアの寝ている部屋に案内していた。こんな男でも、まだ一応はレティシアの婚約者なのだ。
ハリス侯爵令息は、泣きながらレティシアの手を握り、何度も謝っていた。
それを見た私は、後でレティシアの手を拭いてやろうと決めた。あの汚れた手で、レティシアを

触らないでほしい。
あの男をうちの邸に出入り禁止にするために、私は義両親に例の映像石の動画を見せることにした。
動画を見て怒り狂った義両親は、すぐにハリス侯爵家に遣いをやった。不貞のことは伝えず、しばらくは療養に専念させたいということにしてあの男を立ち入らせないようにしたのだ。
さらに私は婚約解消を急ぐ義両親に、まだ待ってもらうことにした。
あんな男でもレティシアは慕っていた時期があったのだ。レティシアの意思を聞いてから決めてあげたかった。
レティシアが目覚めない間、あの男は何度か見舞いに来たらしい。
側に付いていたい、顔が見たいと言って引かなかったらしいが、義両親がすぐに追い返し、ハリス侯爵家に苦情を入れたと言っていた。
あのバカは一体何を考えているのだ？
そんなにレティシアが好きなら、なぜあんなことをしたのだ？　絶対に許さない。
レティシアが転落して十日ほど経つ頃だった。私が学園から帰ると、義両親が泣いている。
レティシアに何かあったのか……？
「クリス……。うっ、うっ。レティシアが……」

「義母上、レティシアがどうしたのですか？」
最悪の事態を予想して、また血の気が引いていく。
「……目覚めたのよ。でも……、うっ」
目覚めたって？　ああ、良かった。
「今から顔を見て来ます！」
「クリス、待ちなさい！」
「義父上、どうしました？」
義父が深刻な顔で私を呼び止める。
「レティシアが、私達のことを覚えていないのだ。侍医は記憶喪失だと言っていた……」
「……覚えていないのですか？　私のことも？」
なんてことだ……
「クリスのことはわからないが、私達やメイド、自分の名前すら覚えていなかった。侍医は、何か辛いことがあって、ショックを受けた後遺症なのか、それとも、転落して頭を打ったことによる後遺症なのか、原因はわからないと言っていた」
どうしてレティシアばかりが、こんなに辛い目に遭うのだろうか……？
レティシアはあの日泣いていた。家を出ることになっても婚約を解消したい、と。
そして、その後にバルコニーから転落した。部屋には家出の準備をしたと見られるバッグが

あった。
そのことを知った義両親は、己自身を責めた。
幼い頃に婚約者なんて決めなければよかったと……。仕事ばかりで、寂しい思いをさせ、親としての愛情を上手く伝えてあげることができなかった。もっと一緒に過ごす時間をとってあげれば良かったと……。レティシアが目覚めるまで毎日泣いていたのだ。
確かに、義両親は忙しくてレティシアといる時間が少なく、心の距離はあったように思う。
しかし、諸悪の根源はあの男。
レティシアの気持ちを再度確認し、婚約破棄してもいいとなったら、あの男と尻軽女にきっちりと報復してやる！

目覚めたレティシアを訪ねると、私を見て言葉を失くしている。声を掛けても、驚いたような表情をするだけ。
やはり私のことも忘れてしまったようだ。
見兼ねたメイドが、私がレティシアの義兄だと教えたことで、はっとした表情をする。
「レティシア、私のことも忘れてしまったのか？」
「あの、私のお兄様なのですね？　記憶が失くなってしまい、ご迷惑をお掛けしますが、どうぞよろしくお願いします」

口調も雰囲気も前とは違っていた。本当に記憶喪失らしい。
「……よろしくお願いします？　初対面みたいだな」
義両親から話を聞いて覚悟はしていたが、ショックだった……
その場にいるのが辛く、長居はせずに自分の部屋に戻る。
自室で私は今までを振り返ってみることにした。
今までは、レティシアと過ごす時間はほとんどなかった。
許されるならば、これからはずっと彼女の側にいて、支えたいと思う。
レティシアが長らく失っていた笑顔を、私が取り戻してあげたいし、仲の良かったあの頃のように戻りたい。
レティシアに心から尽くしていきたいと思う。
王太子殿下には事情を話して、しばらくは生徒会の仕事も、執務の手伝いも休む許可を頂いた。
殿下や友人達からは、隠れシスコンをやめたのかと言われたが、そんなことは気にしていられない。
私は何をするにも、レティシアを最優先すると決めた。

次の日から学園から早く帰るようにして、レティシアと過ごす時間を大切にした。
私が部屋に行くと、レティシアはまだ慣れないのか、恥ずかしそうな表情をする。

この表情は、まだ私がこの家に養子に入ったばかりの頃によく見せてくれた表情と一緒だ。
可愛すぎる！
しかも、私が関わることを喜んでくれているのか、嬉しそうに微笑んでくれさえするのだ。
もう、この気持ちは止められないかもしれない。
記憶を失ったレティシアは、とにかく可愛すぎる。
昔のように仲良くなりつつ、状況を見てあのバカ男のことを話し、今後、婚約をどうしたいのか聞いてみよう。
うちは筆頭侯爵家で、金銭面でも問題ないから、この婚約話がなくなっても何も困らないし、相手が有責だ。
しかも、こんな可愛いレティシアならいくらでも相手は見つかるだろう。
……いや、レティシアは誰にも渡さない。

◇　◇　◇

僕、ジュリアン・ハリスはハリス侯爵家の跡取りとして、両親に大切に育てられた。
十歳の時に参加した王妃殿下主催の茶会で、父の親友のロバーツ侯爵と令嬢のレティシア嬢を紹介される。

私より一つ年下のレティシア嬢は、ストロベリーブロンドの輝くような髪とくりくりの大きな青い瞳、整った顔立ちの美少女だった。
父親から私達に挨拶するように促され、恥ずかしそうに挨拶する姿が初々しくて可愛らしい。
一目惚れだった……
邸に帰った後、私は両親にレティシア嬢と婚約したいと頼んでいた。
「レティシア嬢に一目惚れしました。ぜひ婚約させてください！」
「まあ。リアンが一目惚れですって！」
「そうか。一目惚れか……。しかし、一人娘で婿取りをすると言っていたから、ロバーツ侯爵家はレティシア嬢を嫁に出すかわからない。しかも、望めば王子妃になれるくらいの名門の令嬢だ。侯爵に婚約の打診はしてみるが、難しいことだというのはわかってくれよ」
両親はその後、私のために粘り強く婚約を申し込んでくれた。
その甲斐あって、一年後にはやっと婚約者になることができた。
正式に婚約者になってからは、とても幸せだった。
レティシアは可愛くて素直で優しい子だ。私に会うと嬉しそうにしてくれるし、手を繋ぐと顔を赤くして恥ずかしがるのだ。レティーという愛称で呼ぶことも許してくれた。
友人達から羨ましがられるくらいに可愛いレティー。
大好きで、これからもずっとこんな仲でいられるのだと思っていた。

しかし、ある時からレティーに変化が表れる。
ロバーツ侯爵家が跡取りとして親戚から養子に迎えた、義兄のクリストファーが来てからのことだ。
レティシアは何かにつけて『お義兄様が……』と、義兄の話ばかりをするようになる。
義兄妹同士で手を繋いでいたり、仲良く微笑み合ったり、両親が多忙なので、食事はいつも二人で食べていると聞いた。
私の心の中が真っ黒に染まっていく。イライラするし、義兄の存在が面白くない。
我慢のできなかった私は、レティーに話をすることにした。
『あまり義兄上と仲良くしないでね』と。
婚約者である私の願いをレティーは理解してくれたようで、その後にレティーから義兄の話を聞くことがなくなった。義兄も私達を気遣って、あまり近づいて来なくなった気がする。
……それでいいんだ。私達は婚約者なのだから。
義理の兄と仲が良すぎるなんて、周りから何と思われるかわからないのだから。
レティーは、高位貴族専門のマナー講師をしている彼女の母君から、貴族令嬢としての行儀作法を厳しく躾けられ、誰もが認める令嬢となった。

幼い頃のように顔を赤くしたり、恥ずかしがったりと感情を表に出さなくなり、レティーの可愛さがなくなってしまった気はしたが、相変わらず美しくて聡明で、優しいレティーを私は深く愛していた。

私が一年先に貴族学園に入学してからも、休日には会う約束をして私達は仲良く過ごしていた。

そして一年が経過し、レティーが入学する年になった。

「リアン。今度、うちの遠縁で田舎の男爵家の令嬢が来ることになったわ。うちに住んで、邸から貴族学園に通うことになるから、面倒を見てあげなさい」

母から呼び出された私は、遠縁の令嬢の話を聞かされる。

「遠縁の男爵令嬢ですか？」

「かなり遠縁で、ほぼ他人よ！　お父様が男爵に頼まれて、うっかり引き受けてしまったらしいの。貧しくて寮費を払うこともできないらしくてね。あまり評判の良くない男爵家だから、令嬢にも注意はした方がいいわ」

母は令嬢を預かることに乗り気ではないようだった。

数日後、その令嬢がうちの邸に来て、母が乗り気でない理由がすぐにわかった。

「ミリア・ゾグラフです。ミアって呼んでくださいね」

母の彼女を見る目が恐ろしい。侯爵夫人である母は、礼儀に厳しいのだ。

「あのぉ、貴方がこの侯爵家の跡取りの方ですか？　すごいカッコいいですねー」

私達が引いていることにも気付かずに、馴れ馴れしくペラペラと喋る女。

「貴女、平民なの？　礼儀もマナーもご存じないみたいだけど？」

母がついにキレたようだ。

「だから、ゾグラフ男爵家ですってば。でも、少し前までは市井で母と過ごしていました。母が亡くなって、父のゾグラフ男爵に引き取られたんです」

男爵の私生児らしい……。貧しいと聞いていたが、外に女がいたのか？

「……貴女。もし、侯爵家の名を汚すような真似をしたら、すぐに出て行ってもらいますから。わかったわね？」

「えっ？　……気を付けます。でも、親戚なんだから、よろしくお願いしますね！」

この女との出会いが、私の人生を狂わすことになる。

新学期が始まった。

昨日は、新入生の入学式が行われて、今日からは全校生が登校して授業が始まる日だ。

レティーも今日から登校して来るはず。

初登校のレティーを迎えに、ロバーツ侯爵家に行きたかったのだが……

「ジュリアン様ぁ。貴族学園が広すぎて迷ってしまうのですぅ。私と一緒に行ってもらってもいい

ですか？」
別々の馬車で行くつもりだったのに……
「リアン！　今日は初日だから、今日だけは面倒を見てあげなさい！」
「今日だけだぞ！」
「ふふっ！　ありがとーございまーす！」
学園に着き、馬車を降りて歩いていると、
「リアン様、ご機嫌よう」
レティーが挨拶に来てくれた。
会いたかったから嬉しい。制服姿のレティーはすごく可愛かった。
「レティー！　入学おめでとう。これから毎日学園で会えるなんて嬉しいよ」
愛する婚約者に会えたことが嬉しくて、思わず笑顔になる。
「こちらこそリアン様、これからどうぞよろしくお願いします」
レティーは礼儀正しくカーテシーをしたが、ミリアはあっけらかんと言った。
「ねぇー、ジュリアン様ぁ。このコは誰ですかぁ？」
この女、いちいち邪魔だな。
「私の婚約者のレティシア・ロバーツ侯爵令嬢だ」
「レティシア・ロバーツですわ。どうぞよろしくお願いいたします」

「……婚約者？　あっ、ミリア・ゾグラフです。ジュリアン様と一緒に住んでるの。よろしくね」
この女、侯爵令嬢のレティーになんて態度なんだ！
しかも、わざとらしく私の腕に自分の腕を絡めてきて本当に不愉快だ。
私の腕に触れていた、女の手を離そうとした時だった。
令嬢として完璧で、感情を表に出さないレティーが、私の腕を見て悲しそうな顔をしていることに気付いてしまったのだ。
……可愛い！　こんな表情を久しぶりに見た気がする。
レティーはこの女に嫉妬しているのか？　こんな女なんて、レティーが心配する価値もないのに。
レティーはこんな女に嫉妬するほど、私が大好きなんだな。
愚かな私は、レティーの嫉妬が嬉しくて、この女を利用することにした。
後にその行動を後悔することになるとも知らずに。

『レティー、放課後はミア、ああ、ミリアに勉強を教える約束をしているんだ。ごめんね』
『ミア？　ただの親戚で面倒を見るように言われているだけだよ。妹と変わらないから、レティーが心配する必要はないよ』
『ミアはダンスが上手くできないから、レッスンに付き合っているだけだよ』
『ミアがパーティーでエスコートしてくれる人がいないって泣いているから、今回は親戚の私がエ

スコートを頼まれちゃって。レティーは義兄上にお願いできるかな？』
『ミアがレティーに虐められるって言ってるんだけど、そんなことしていないよね？　何もわからない子だから、優しくしてあげてほしいんだ』
レティーは私が約束を断るたびに悲しそうな表情をしていた。
こんな女に私が惹かれる訳がないのに。レティーは本当に可愛い。
しかしこんなことを続けるうちに、レティーの心は私から離れていってしまった。
こんな酷いことをしていたのだから嫌われてしまうのは当然なのに、愚かな私はそのことに気付かなかったのだ。

もうすぐ学園長主催の、学期末のパーティーが開かれる。
最近はレティーと一緒に過ごす時間が減っていたから、今回はドレスやアクセサリーをプレゼントしよう。エスコートもして、ダンスもレティーとたくさん踊ろう。
あの女ばかりを優先し続けるのは良くないだろうから。
そう考えた私は、学園でレティーに話しかけたが……
「レティー、今度の学園のパーティーだけど……」
「ジュリアン様。わかっておりますわ。ゾグラフ様を優先してくださいませ」
レティーが私に見せた表情は、誰にでも向ける貴族令嬢らしい作り笑顔だった。

「レティー、何を言ってるの？　私はレティーと一緒に参加したいのだけど」
「いえ。私はただの婚約者。幼い頃にお互いの両親が決めただけの、ただの政略結婚の相手でしかありません。学生のうちはジュリアン様が思う方と、存分に楽しい時間をお過ごしくださいませ。失礼いたしますわ」
愛するレティーに突き放されたことに気付き、追い縋って懇願しようとするが、彼女はそのまま去って行ってしまった。
幼い頃に両親が決めただけの婚約者？　そんなことはない！　私はこんなに君を愛しているのに。
レティーは何を言ってるんだ？　しかも、私の呼び方がジュリアン様になっている。リアンって呼んでくれていたのに、どうして？
ある日の休み時間、教室を移動するため、一年生の教室の前を友人と歩いていると、嫌な声が聞こえてくる。
「ねえ！　アンタでしょ？　私のノートを破いたのは？」
ミアの声だった。なんて品のない言動なんだ。
「何のことでしょうか？　ノートを破られたのはお気の毒ですが、なぜ私を犯人だと決めつけるのでしょう？　貴女のクラスも席もわからないのに」
ミアがレティーに絡んでいるようだ。
「おい！　ジュリアンの婚約者が絡まれてるぞ」

「ああ。あの女、許さない！」
友人とそんなやり取りをして、止めようと近づいて行くと……
「何よ！　私が下級クラスだからってバカにしているの？　アンタ、私に嫉妬していたじゃない。婚約者のリアン様が私を好きだからって」
「はい？　なぜ私が貴女に嫉妬する必要があるのです？　婚約者とは、幼い頃に両親が決めた家同士の契約のようなもの。私達の意思は関係ありませんし、嫉妬というような感情は持っておりませんわ。貴女は、貴族の婚約を何だと思っているのです？」
レティーがミアに話している内容を聞き、私は奈落の底に突き落とされた。
レティーは私に対して、嫉妬という感情すら持っていないってことなのか？
その時、ミアが私に気付いたようだ。
「酷いわぁ。私が元平民だからって！　あっ、リアン様ぁ。レティシアさんが虐めるのですぅ」
「あら、ちょうど良かったですわ。ジュリアン様、貴方の大切なゾグラフ様のノートが破られて困っているようですわ。助けてあげてくださいませ。……ご機嫌よう」
「レティー？　何を言って？　私が大切なのはきみ……」
レティーは友達と連れ立って行ってしまった。
レティーの友人達や、その場にいたほかの生徒達の視線が冷たい。
この時になって私は全てを理解した。レティーの心は私から離れてしまったのだと。

そして、あの女は被害者ぶりながら、レティーに嫌がらせをしていることも。
あの女の態度に腹を立てた私は、放課後に呼び出して話をすることにした。
レティーの話もするので、家族にその会話を聞かれたくなかった私は、あの女に話をする場を家ではなく、学園で人気（ひとけ）のない校舎の裏庭にすることにしたのだが……。それが全ての間違いだった。
「リアン様ぁ！　お待たせしましたー」
放課後、あの女はニコニコしてやって来た。気持ちの悪い女だ。
「名前で呼ぶな、家名で呼べ！　私をリアンと呼んでいいのはレティーだけだ」
「あの女は私を裏で虐めるのですよぉ。それに、両親が決めただけの婚約者だって言ってましたよねぇ。私ならリアン様を深い愛で包んであげられるのに。リアン様、大好きです！」
すると、ミアは急に私の首に抱きつき、口づけをして来た。
ドン！　私は、無意識にミアを突き飛ばしていた。
「きゃあー！　酷い」
「何をする？」
「だってー、好きだからキスしたいって思うでしょ」
こっちは気持ちが悪くて吐きそうなのに、この女は悪びれる様子もない。
「うっ……。気持ちが悪くて吐きそうだ……」
「えっ？　私のこと好きじゃないの？　キスされて嬉しいでしょ？」

「私がお前みたいな、バカで下品で、大切なレティーを陥れようとする女を好きになると思うか？　今すぐ死んでほしいくらい大嫌いだ」
「ウソよ！　私を大切にしてくれたし、あの女よりも私を優先してくれていたじゃない！　私を侯爵家のお嫁さんにしてよ。私にはリアン様しかいないの」
お嫁さん？　絶対にありえない！
しかし、この女を勘違いさせたのは、私の手落ちだ。
「親戚として頼まれたから面倒を見ただけだし、大嫌いだから、今すぐにでも家から出て行ってくれ！　お前は、私のレティーを傷つける害虫でしかない」
「酷い！　私はこんなに好きなのに。……でも、残念でしたぁ。さっきキスしているところを、リアン様の大切な人に見られちゃいましたねぇ」
レティーが見ていた？
「いい加減にしろ！」
「本当ですよー。実は……、放課後にリアン様に呼び出されて告白されそうだから、見に来てくださいって、あの女に知らせておいたの。そしたら、あの陰から見てましたねぇ。キスしたら、すぐにいなくなっちゃいましたけど……。だから諦めて私にしません？」
私から呼び出されているからと、レティーに見に来るように伝えていた？
その時に気付いた。私がこの女を利用しようとして、反対にこの女から利用されていたことに。

**立ち読みサンプル
はここまで**

私はなんて愚かなんだ……
今すぐにレティーに謝りに行かなければ！
ギャーギャー言っているミアを無視して、急いでレティーの家に行ったのだが……
「お、お嬢様が……、お嬢様が落ちて……。いやぁぁー。お嬢様ぁー！」
メイドが取り乱して叫んでいる声が聞こえる。慌てて駆けつけ、部屋をのぞくと部屋にいると思っていたレティーの姿が見えない。
レティーはバルコニーの下で、血を流して倒れていた。
私のせいなのか？　私がレティーを裏切るようなことをしたから、死のうとした？
レティー、早く目覚めて私を叱ってほしい。
殴られようと、罵倒されようと、無視されようと、この先ずっと愛されなかったとしても、私の一生をかけて償うから、私から離れないでくれ。
私はレティーを愛しているんだ。